



## 蜜柑（6）

しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下った膝の上には、大きな風呂敷包みがあった。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なのもやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえも弁

わきま





## 蜜柑 (7)

えない愚鈍な心が腹立たしかった。  
だから巻煙草に火をつけた私は、  
一つにはこの小娘の存在を忘れた  
いと云う心もちもあって、今度は  
ポケットの夕刊を漫然と膝の上  
へひろげて見た。するとその時夕  
刊の紙面に落ちていた外光が、突  
然電燈の光に変わって、刷の悪い何  
欄かの活字が意外な位鮮かに私の  
眼の前へ浮んで来た。云うまでも



## 蜜柑 (8)

なく汽車は今、横須賀線に多い  
トンネル  
隧道の最初のそれへはいったので  
ある。

しかしその電燈の光に照らされ  
た夕刊の紙面を見渡しても、やは  
り私の憂鬱を慰むべく、世間は余  
りに平凡な出来事ばかりで持ち切  
っていた。講和問題、新婦新郎、  
とくしよく  
流職事件、死亡広告——私は隧道  
へはいった一瞬間汽車の走ってい



## 蜜柑 (9)

る方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠さくばくとした記事から記事へ殆ほとんど機械的に眼を通した。が、その間も勿論もちろんあの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちおももで、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいられなかった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋うずまうず

## 蜜柑（10）

まっている夕刊と、——これが象  
徴でなくて何であろう。不可解な、  
下等な、退屈な人生の象徴でなく  
て何であろう。私は一切がくだら  
なくなつて、読みかけた夕刊を抛<sup>ほう</sup>  
り出すと、又窓枠に頭を靠<sup>もた</sup>せなが  
ら、死んだように眼をつぶって、  
うつらうつらし始めた。

つづく